自傳

自傳

辻湊

明治九年十一月一日小原蔵三郎の長男として佐賀県小城郡外
に生れ後佐賀郡川上村に移転し更に佐世保軍港に転居す明治二十
四年七月同地の高等小学校を卒業するや直ちに上京し辻慶蔵について
中学予備館に通学す。辻氏は伯父に当り後その養子となる。始め海軍
を志したるも近視のため遂に此希望を断念し第三高等学校を経
て明治三十七年七月京都帝国大学理工科大学機械工学科を卒業し在学中
実地実習をした縁故で株式会社東京石川島造船所に入社す。当時
日露戦争の初期で多忙と云ふ程でもなかつたが漸次陸海軍の注文殺到
し連日暁に出て夜半に帰る状態となつた。年月を重ねるに従ひ社業に精
通し約二年の後同社設計科副科長となり在庫品の整理や設計図の整
理を断行し成績優秀のため二回の特別昇給を受けた。明治四十一年
留を辞任し鈴木商店経営の神戸製鋼所技師長と
なす。在任僅か一年有半で製糖機械調査の目的で
帰朝の途次台湾に寄港し鈴木商店が企図せし
丸を決定す。神戸帰着後直ちに調査に基き製

自傳

辻　湊

明治九年十一月一日小原儀三郎の長男として佐賀県小城町郊外で生れ後佐賀郡川上村に移転し更に佐世保軍港に転居す明治二十四年七月同地の高等小学校を卒業するや直ちに上京し辻泰城方より中学郁文館に通学す泰城は伯父に当り後その養子となる。始め海軍を志したるも近視のため遂に此希望を断念し第二高等学校を経て明治三十七年七月京都帝国大学工科大学機械学科を卒業し在学中実地実習をした縁故で株式会社東京石川島造船所に入社す。当時日露戦争の初期で多忙と云ふ程でもなかつたが漸次陸海軍の注文殺到し連日暁に出て夜半に帰る状態であつた。年月を重ねるに従ひ社業にも通じ約二年の後同社設計科副科長となり在庫品の整理や設計図の整理を断行し成績優秀のため二回の特別昇給を受けた。

明治三十七年（西紀一九〇四）

明治四十一年（西紀一九〇八）

明治四十一年十月先輩の慰留を謝辞し鈴木商店経営の神戸製鋼所技師長

として神戸に移住す。在任僅か一年有半で製糖機械調査の目的でジャワに出張し帰朝の途次台湾に寄港し鈴木商店が企図せし製糖工場の敷地を決定す。神戸帰着後直ちに調査に基き製糖工場の設計を急ぎ之れが完成を待つて注文決定のためシベリア経由独英に急行し諸工場を視察の上各部を特長を持つ製造会社に分割して注文を発し是等を綜合して完全な製糖工場を建設した。

明治四十三年（西紀一九一〇）

是即ち明治四十三年秋創立の北港製糖株式会社の工場で筆者は取締役技師長の役に就く而して此会社は後年東洋製糖及び斗六製糖の両社を合併し、東洋製糖会社と改称された。機械が優秀なりしため創業の初年度から高率の利益を挙げ株主から感謝され且つ業界でも有名になり今尚台湾の模範工場になつて居ると云ふ面目之れに過ぐるものはない而して物質的にも破格の好遇を受けた。

大正三年（西紀一九一四）

更に東部台湾宜蘭にある旧式製糖工場と軽便鉄道や植林開墾事業を経営するため大正五年四月播磨造船所の経営に当る迄在任し其間台湾総督府が不許可を鉄則として居つた新式製糖工場即ち分蜜糖を製造する工場の新設許可を百方手を尽して此鉄則を突破し離台の直前

遂に許可を得たが適当な後任者がないので幸に三井系の人が切望する故投資額の約三倍で譲渡したのは此許可が専ら役立つた訳で此のため特賞が授けられた。

大正五年（西紀一九一六）

茲に造船所の方は第一次世界大戦が追々進行し独乙の潜水艦が大西洋や地中海は勿論太平洋迄も進出し至る処で連合軍の艦船を撃沈したので十分に補充が出来ず船腹は減る一方で運賃や船価は上昇又上昇停止する処なく、戦争の進行と共に益々船腹の不足を告げ買船希望者が造船所に殺到する実状であつた。従つて船価は突飛に高騰し特に外国の希望者は一万屯級の大型船を要求するが此クラスの造船には相当の設備が必要であるから価額も一段と高く取引された。そこで直ちに英国や国内のメーカーに製作機械の注文を発したが納入期が遅くこれを待つて居られないので手仕事で機械を使用したのと殆んど変らない方法を工夫して一万屯級貨物船二隻を完成輸出し我国の造船界を驚かした。一例を挙ぐれば川崎造船所の目良技師長は其の第一船よね丸の進水式に臨み播磨造船所が一万屯貨物船を建造して居

ると云ふ事を耳にしたけれど二、三千屯の小型船なら兎も角一万屯の大型船は設備を持たないで出来る筈がないと言つて信じなかつたが今日目前に正に一万屯の巨船が進水したのを見るに至つて其努力に驚歎せざるを得ないと挨拶した程に技術的に困難な仕事であつた。当時一万屯級船一隻を売れば利益の一部で百戸位の社宅が楽に建築出来る時節だから依是挙げた利益は可なり巨額であつた事は勿論である。此の戦争中に於ける我国造船界の最大の問題は所謂日米船鉄交換問題であつた。其の発端は日本は造船力は余つて居るが鋼材がない。米国は鋼材はあるが造船力がないのであるから米国から材料の供給を受け是れで船を造り提供すれば有無相通じ連合国のため大に貢献する事が出来ると思ひ金子直吉氏に話した処、早速之れを取揚げ東京商工会議所会頭郷誠之助や大隈侯を説伏して金子氏の大活動が始まり約一年を費し船一屯に鋼材一屯の割で相互に提供する交渉に成功し造船界は再び活動するを得、巨額の外貨を獲得した事は特筆に価する。終戦後貨物船の船価は急降下したが油槽船は尚当分高値を維持する見込であつ

たから技師を英国に急行せしめ専門家に油槽船の設計を依頼し三隻を建造した。其の頃日本では正式の油槽船を建造した経験がないので海軍が建造した日本製の油槽船二隻は使用上不便なため呉軍港に繋留して播磨造船所で建造した三隻をチャーターし内一隻は初航海の時瀬戸内海で沈没し他の二隻は第二次世界大戦まで海軍で引続き使用して居つた。現在日本の各造船所が建造して居る油槽船は之れを手本として設計されて居ると思ふ。

播磨造船所と同時に鳥羽造船所を経営した。此造船所は主として三、四千屯の小型船を建造し第一次大戦後は戦時中に貨物船に改造又は国外に売船したトロール船の再建造に力を注ぎ更に我国の小型漁船が全部木造船で一寸した嵐にも難破するものが尠からず深く之れを遺憾とし鋼鉄船にして安全性を強化し魚の居る所まで前進出漁し得る様にすれば漁業家の利益は大に増加され且つ不漁の憂が除ける事を提唱し農林省水産局も大に共鳴し鋼鉄漁船を建造する者には船価の約三分の一の補助金を出し奨励する事に決め且つ道府県の漁業指導船は残らず鋼鉄船とする様勧誘し鳥羽造船所が指定

工場となつた。倘鳥羽造船所に電機部を設けた。今の神鋼電機の前身である。当初の意図は海上用電機を作る専門工場とする積りであつたが是れ丈けでは事業として成り立ぬ故小型電機製造の専門メーカーとなる想定の下に販売方法として代理店を利用する方法を執り先づ大需用地である東京と大阪に専属代理店を設けたが製品に欠点が多く経営も又宜しきを得ず所期の成果を挙げる事を得なかつたのは残念であつたが、其の後人絹ポットモーター、ワードレオナード装置、計算機等独特な技術を以て特殊品に市場を開拓し社運の発展を見つゝある事は欣快に堪へない。

鳥羽造船所の管理下に東京無線電機があつた関係からトロール船に無線電信機を装備する事を進言したが初めは部屋がないとか船室がないとか色々難色があつたので造船技師に無線電信室や通信員船室を設計させ且つ無線メーカーを説得して無線三社(日本、安中、東京)が各一台ずつを提供し三船に取付け代金は後払とし若し船主が不必要の場合は無償で取払ふ契約の下に試験した結果予期以上の効果が確認され一挙にしてトロール船は残らず全部無線通信機を装備する事になり誠に愉快な成功であつた。斯様な機会から従来無線メーカー三社が官庁などの入札にはいつも無益な競争で赤字注文を取る愚を指摘し三社協定の上適正の価額で見積り輪番に注文を取る事を提言せし処三社も共に異存なく意見が一致し実行のため三社の幹部は屡々会合する機会に恵まれ放送事業を起す相談が出来た。そこで此事を当時の通信局長田中二郎氏が同郷人で懇意だつたので其の意見を叩いた処大賛成で夫には通信社や新聞社との連絡を密にする事が肝要だと云ふので通信局をして斡旋をさせ、大新聞社と通信社に結びつけ色々曲折はあつた

大正十三年
（西紀一九二四）

が遂に財団法人日本放送協会が成立し芝浦製作所の中原社長が理事長になり、最初の監事になつた。協会成立までは殆んど産婆役を務めて来た訳である。

其の後鈴木商店の人事の都合で再三辞退したけれど将来大事業となる期待のもてる硫安製造工業を主宰する様になり試験工場が下関の彦島にあつたので造船は勿論無線の方も人に譲り此新事業に専念し諸般の研究準備を

終り、自是本格的の仕事に移らんとする間際に鈴木商店の主取引銀行である台湾銀行から取引停止の宣言を受け閉店の悲境に陥り硫安事業は台湾銀行により強引に三井鉱山会社に譲渡され東洋高圧工業会社として今尚隆盛に経営されて居る。台湾銀行は再三事業と共に三井に行く様勧めて呉れたが之れを拒絶し、金子氏の指揮の下に鈴木商店の跡始末に従事した。

昭和六年（西紀一九三一）

昭和六年国際労働会議資本家代表金光庸夫氏の顧問としてジュネーブの労働会議に列席し会議終了後、独乙英国北欧を経て米国に渡り各国の水産加工食糧の市場、並特に独乙に於ては兼々念頭にあつた石炭液化事業の調査をして帰朝した。

昭和五年（西紀一九三〇）

是より先鈴木商店退職後、同店関係の金子三次郎氏鈴木正氏等と共に日本食糧株式会社を設立して各種食糧品の加工を研究して居たが種々努力の結果漸く輪出向の鮭燻製油漬罐詰を完成し専売特許を獲得した。之が販売については野崎商店、三菱商事、三井物産、セール商会等十数社より続々注文殺到し、仕向先は米国を主として英仏独伊西や中南米濠洲アフリカの各地六十余港に輪出され好評を博し年々需要は激増し前途更に飛躍を期待されたが、好事魔多く米国の深刻なる不況と第二次欧洲大戦の勃発により一時に注文頓挫し更に大東亜戦争に突入して欧米諸国への輪出が杜絶した為余議なく製造を中止する事となり業績不振に陥り在満中に会社は遂に解散し終つた。

尚日支事変の進展に伴ひ皮革の需要は激増する反面供給益々不足を訴へ、一般大衆の日常生活より牛革類は影をひそめズック靴や鯨皮靴が代用される時代となり、偶々日本食糧が鮭罐詰製造の副産物、鮭皮転活用を兼ねて鮫鯨皮と共に水産皮革を率先事業化し一応の成功を収めたが渡満を機会に事業を人に譲つた。水産皮革の事業は爾後日水、大洋、極洋を中心に終戦迄牛革の代用品として皮革業界に大いに進出するに至つた。

又、この間、金子氏の依頼により東京新薬株式会社の製薬事業を引受け、塚田暢市君と共に結核の治療剤其他、数種類を発売し畑違いの仕事であるので幾多思はぬ失敗にあつたが、何とか事業を継続し、是亦渡満を機に塚

田君に譲つたが、終戦の年に工場も事務所も、爆撃にあつた事は残念であつた。

労働会議を終つて帰朝すると知友長久伊勢吉君が日本油脂を出て独立して朝鮮魚油の中心である清津で油脂の製造を目論見、会社を設立する計画があり其の資本の一部を鈴木商店関係で出資するので代表として経営に参加する事になり工場の建設を担当し竣工作業開始後も暫く情勢を注視して居つたが経営に若干不安を感ずる点があつたので時機を見て手を引く方が賢明と考へ其旨金子氏に進言したが幸に鮎川義介氏が日本油脂の買収に失敗したを好機とし交渉の結果株価六十五円で全部をまとめ譲渡する相談が成立し其の後三、四年を経るや潮流水温の関係から朝鮮沿岸に鰯群が全然寄付かず従つて油脂の原料魚油が得られず遂に工場は閉鎖された。素より斯様な事を予知した訳ではないが結果に於て鮎川氏には真に気の毒であつたが幸に鮎川氏の方も日本油脂の親会社である大日本人造肥料の経営権を掌握した爲朝鮮油脂を日本油脂に合併したので鮎川氏直接の被害はなかつた

と思ふ。彼れ是れする間に世相は遂に第二次世界大戦に突入し初戦にやや優勢であつたが長期戦となるや益々不利となり敗戦の徴いよいよ濃厚となりつつある時金子氏は終戦前に逝去された。彼としては寧ろ幸福であつたかと思ふ。

第一次世界大戦以後航空機の発達が著るしいにも拘らず我国は石油資源に乏しく、航空用ガソリンは専ら外国に仰いで居る状況で国内資源に依る航空油の確保の必要を考へ夙に水素添加による石炭の低温乾溜を研究して居たが、適質の石炭が北海道羽幌に産するを知り金子氏に進言して羽幌炭礦鉄道の発起人となり彼地に於て石炭液化を計画中の処、偶々陸軍に於て満洲奉天で石炭液化工場建設の計画があり、之が協力を神戸製鋼に要請して来たので、神戸製鋼よりの代表として渡満する事となり、羽幌炭礦は知友岡新六氏に後事を委ねて渡満し、昭和十四年四月、関東軍を介し満洲国政府と創立協議会を開き同年八月株式会社石炭液化研究所を創立した。工場建設に当つては計画当初より関東軍池田純久氏の多大の援助を受けたが、

資材の入手が既に困難となりこの爲工事は著しく遅延し加へてドイツに発注した主要機械の到着も遅れ、設備がほゞ完成したのは十九年末となつた。然し試運転には好成績をあげ、オクタン価九十三の優秀航空油百六十キロリツトルを満洲国専売局を経て関東軍に納入し、愈々本格的生産に入つた直後終戦となり、設備をソ連に接収され解体されて持去られた。

終戦当時は満洲奉天（瀋陽）にありて敗戦国民の苦杯を満喫し昭和二十一年八月内地に引揚げた。其際所持せしものは老人の持ち得る一荷の包みと金壱千円が許された。加之留守宅も戦災に会ひ家財諸共焼失し無一物同様で長男賢一宅に避難し悲惨の感を覚えた次第である。在満生活六年有余に及び内地の戦時中や戦後の情勢の大変化と世相の混乱に伴ふ財界の動きは全く不明にして且つ七十歳の老骨であるから新事業は勿論責任ある仕事は一切避ける決心をした。幸に昭和六年以来創立に奔走した羽幌炭礦鉄道の監査役に腰をすえたが金子氏の三男猪一君に監査役の職を譲り全然無職となつた。是より先満洲の会社で液化の合成係長を勤め極めて真面目な技術

者が天草を使用せず安価な尾胡を原料として寒天製造の研究に成功したから援助してほしいと申込み書類を提示したので調査の結果資金も五百万円以内の小額ですむ予算であり製品は輸出も出来又国内では昔から相当の用途があり新に宣伝の必要もなく老人の仕事に適して居ると思ひ此事業を起す決心をした。然るに着手した実相は原料供給者は漁夫で責任を感ぜず事業を安定させるには更に三四千万円の資金を要し其任は重きに過ぐるため残念ながら株券不動産等約四百万円の私財を放棄して松村茂三郎氏に後を引受けて貰ひ再び無一物となつた。

要するに之れが一生の総算である。そもそも学窓を出る直前筆者の人生観として社会に出た場合は飽くまで仕事に専念し断じて銭奴にならないと懇親な学友に宣言したが此信念は無意識の間に個性的となり自然財物を軽視する傾向があつた。自分としては無より出て無に帰り信念に生きた訳で毛頭悔む処はない。否寧ろ最善を尽して奮闘し可なりの結果を挙げ事業を後世に残し地味ではあるが多少とも社会に貢献し得た事に満足して社会的

生活の終止符を打ち、茨城の長男宅に隠棲する事に決意した次第である。
最後迄御援助を頂いた方々に心からの御諒承を願ひつゝ擱筆す嗚呼。

昭和三十一年初夏於茨城県多賀日立製作所
桜川社宅長男賢一宅執筆識之

弔辞

謹而故辻湊君の御霊に捧げます。君は本年三月病床につかれ令夫人始め御家族のお手厚き御看護の甲斐もなく五月廿日忽焉として逝かれました。洵に痛恨哀惜の情に堪えません。昨年十月播磨に於て敬老会が催されました節久しぶりに君のお健かな御姿に接し更に播磨造船、神戸製鋼並に神鋼電機等の各工場を親しく視察せられて帰京されました。当時の矍鑠としたお姿を思い浮べ転た感慨に堪えません。君は資性恬淡気宇高邁身を持すること謹厳にして常にその明晰な頭脳と果敢な決断力を以て能くその経綸を行はれ往くとして佳ならざるなき業績を示された事は衆人の等しく認める処であります。顧みますれば明治三十七年京都帝国大学工学部の機械工学科を優秀な成績を以て卒業され東京石川島造船所の造機設計課長を経て創業期の神戸製鋼所に迎えられ技術面を担当する頭脳明晰なる君と共に神戸製鋼所の発展に日夜尽瘁せる私の思出は実に深いのであります。

然るに本店であつた鈴木商店が明治四十二年に北港製糖株式会社を創立し台湾に製糖工場を建設するに当り抜擢されて本店の命に依り南方諸国の製糖事業を視察し次いで欧洲に出張して製糖機械の諸メーカーを視察の上、英国及び独逸の両国合作による二つの分蜜糖の製糖工場を注文し而して之を台湾の中部及び南部の二ケ所に自ら取締役技師長として建設完成し当時台湾は製糖事業の勃興時代にて欧米よりの製糖プラント数多き中にも北港製糖の工場は英独の粋を集めたる極めて洗練されたる模範工場との定評を得た事はその諸機械の撰択註文に当つた故人の頭脳明晰を物語つたものであります。而して其の完成を見るや引続き鈴木商店の背景を以て台湾北部の宜蘭に拓殖会社を創立して北部の開発に当り偶々第一次欧洲大戦が勃発し鈴木商店が播磨造船所を買収するや其の専務取締役として迎えられ故金子直吉総支配人の主唱による米鉄交換船の建造によつて一般造船並に海運界を大盛況に至らしめた事は有名にて故人としても当時が最も得意の時代であつたと考えられ当時の颯爽たる英姿が今尚偲ばれます。其の間に鳥羽造船所を買収し戦後の不況を慮

つて電気機械その他の機械の製作を開始し、後不況に当つて自ら悪条件を克服して之が経営に心血を注がれ其の事業を今に残された事は真に敬意を新にする次第であります。更に鈴木商店の新事業として仏蘭西より「クロード」式窒素肥料製造の技術導入に努力され而して北海道には海中資源の開拓を目的とした食品会社を創立して此の成功に努力され又羽幌炭礦の開発にも尽力せられ近くは大東亜戦争に即応して創立された満洲に於ける石炭液化会社の社長として当時最も貴重とされた航空燃料の製造の緒に着くに到らしめたるは実に故人の資性の致す処にて之亦敬服の外なき次第であります。

要するに各種の事業に対して理想を以て粉骨砕身然かも身を持する事質素恬淡にして常に新事業に打込むに情熱を以てする事に人生の総てを捧げられたるその人格と識見に対し重ねて深く敬意を表して已まぬ次第であります。

嗣子賢一君は既に社会的地位にあり弟妹子女の方々も夫々円満なる家庭を営まれて居らるゝ由、以て安らかに冥せられん事をお祈りして已みません。冀くは英霊来り享けられん事を。

昭和三十三年五月廿二日

株式会社神戸製鋼所
相談役　田宮嘉右衛門

あとがき

父の死因は真実は癌であつたらしい。然しその方は日頃頑強の爲本人も家族も全然分らなかつた。病床に臥したのは三月の彼岸に墓参りをしたのが因で風邪で寝付き、其の儘黄胆の症状に変つて行つた。五月に入つてからは食慾不振による全身衰弱により寧ろ老衰の現象を呈し臨終は全く眠るが如き自然死に近い大往生であつた。父の死後、遺品の後始末をしたところ、文筐の底から美濃紙に毛筆で書いた自傳が出て来た。三十一年初夏と奥書に書いてあるから今から二年前に何時かは今日あることを予期して書いたものと思はれる。遺稿を読んで今更ながら随分多種多様の事業に手をかけたものと驚いている。生前父に御厚誼を賜つた方々も金子さんが逝くなられた今日父の全生涯を通じて御存知の方々は少なからうかと思つて上梓することにした次第である。

遺稿中に鈴木商店解散後浪人時代日本食糧、日本水産皮革、東京新薬等の

事業を自前で細々とやつていた外、自傳に記載がないが武藤作次さんと「ヴンブロンズ」という称号で軸受合金もやつていた事と多木肥料の窒素肥料工場の建設を多木さんからたのまれて御世話をした事が洩れているので追記する。

父の遺稿を読むと一見手当り次第に事業を起して行つた様であるが、仔細に観ると筋があり、道楽にも嗜好があつた様に思はれる。

台湾の製糖事業は鈴木商店が砂糖問屋から出発した事で頷けるし、造船から舶用電機、舶用無線と発展しているのは当然の途であらう。然し機械工業の方は東京無線迄で終止符を打ち、爾後は彦島のクロード式窒素肥料、多木肥料、朝鮮油脂、満洲石炭液化と一貫して化学工業に転向専念している。

道楽は「海」である。造船に全力を傾倒したのも、浪人時代の日本食糧、日本水産皮革や又最後の寒天事業の原料の尾胡は何れも海産物である。矢張り海軍を志願した若い頃の海への憧れが死ぬ迄離れ得なかつたのではなかろうか。

父は事業に一生を捧げ尽した。事業が唯一の道楽であり楽しみであつた。この道楽のため迷惑をお掛けした点は偏に御海容賜り度く倘自傳中には自画自讃の点があると思うが御寛恕を御願ひし度い。御高読の上父を偲ぶよすがにでもして頂ければ幸甚である。

辻　賢一

昭和三十三年七月一日　印刷
昭和三十三年七月五日　発行　（非売品）

著　者　辻　　湊

東京都世田ヶ谷区東玉川町九〇

発行人　辻　賢一

東京・日本橋　大塚巧芸社